

平成28年度 社会福祉振興助成金事業報告書

## 若年性認知症の人のための仕事づくり

特定非営利活動法人認知症の人とみんなのサポートセンター

平成29年3月発行



独立行政法人福祉医療機構  
社会福祉振興助成事業



## はじめに

平成 28 年度社会福祉振興助成金を受け、「若年性認知症の人のための仕事づくり」に取り組んだ。居場所の整備、人材育成、仕事の開拓などを行った。

タックの利用者アンケートでは、タックのような「生きがいとしての仕事の場」は必要で、本当に認知症の人同士の交流や居場所が必要であることが、改めて明らかになった。

タックに通う事で「生活のめりはりができた」「明るくなった」「病気に対しても楽観的になった」「家族との会話が増えた」などの本人の変化がみられており、家族はタックの活動を必要だと感じており、通う日数を増やしたいと考えている人もいた。

通う日数が週 5 回と増えても、1 日あたりの利用者数は 6 名弱であり、昨年度とあまり変化がなかった。このことは、スタッフが定着しなかったことが原因であったのではないかと考える。また、週 5 日必要としている人は少ないともいえる。家族やガイドヘルパーで通う人は、週 5 日は困難であった。

本事業で一番困難であったのが、スタッフ人材育成であり、ハローワークでスタッフを募集し雇用を行ったが、特に有資格者のフルタイム雇用が困難であった。スタッフの雇用が安定しなかったために、利用者の数が増えなかったことや、仕事に慣れ仕事を開拓していくことも困難であった。

これからも、研修などを継続し時間をかけた人材育成がまだまだ必要だと考えられる。

4 月以降、サポートのスタッフが十分に確保できていないために、居場所を法人事務所にもどし、自主的に活動できる若年性認知症の人だけに通ってもらい、半自主的な活動を試みてみたいと思う。通所や作業のサポートの多い利用者は、タックで集団活動の経験を活かし、身近な地域の介護保険や障害のサービスにつなげていく予定である。

介護保険や障害の制度にも利用が適さない状態であり、居場所を必要とされている人はおり、月 1 回のカフェや当事者交流会ではニーズが満たされない人には、タックのような居場所は必要である。

今後は、若年性や初期の認知症の人の居場所として開放しながら、サポートの人材育成や認知症の進行予防にもつながる内容を実施できたらと考える。

平成 29 年 3 月

特定非営利活動法人

認知症の人とみんなのサポートセンター

代表理事 沖田 裕子

# 目次

ページ数

1. 事業の目的と概要	1
2. 事業内容	2
1) 居場所の整備と活動	2
2) スタッフの育成	4
3) 仕事の開拓	9
4) アセスメント表の作成	19
5) 連絡会の開催	26
6) タック利用者アンケート	33
3. 資料	
資料1 研修チラシ	39
資料2 研修アンケート	41
資料3 参加者・仕事募集チラシ	52
資料4 ジョブベース	55
資料5 くるみボタンの行程表	56
資料6 居場所や作業の場づくり	58
資料7 タック利用票	59
資料8 タック利用アンケート	61
資料9 タック利用アンケート結果	64

## 1. 事業の目的と概要

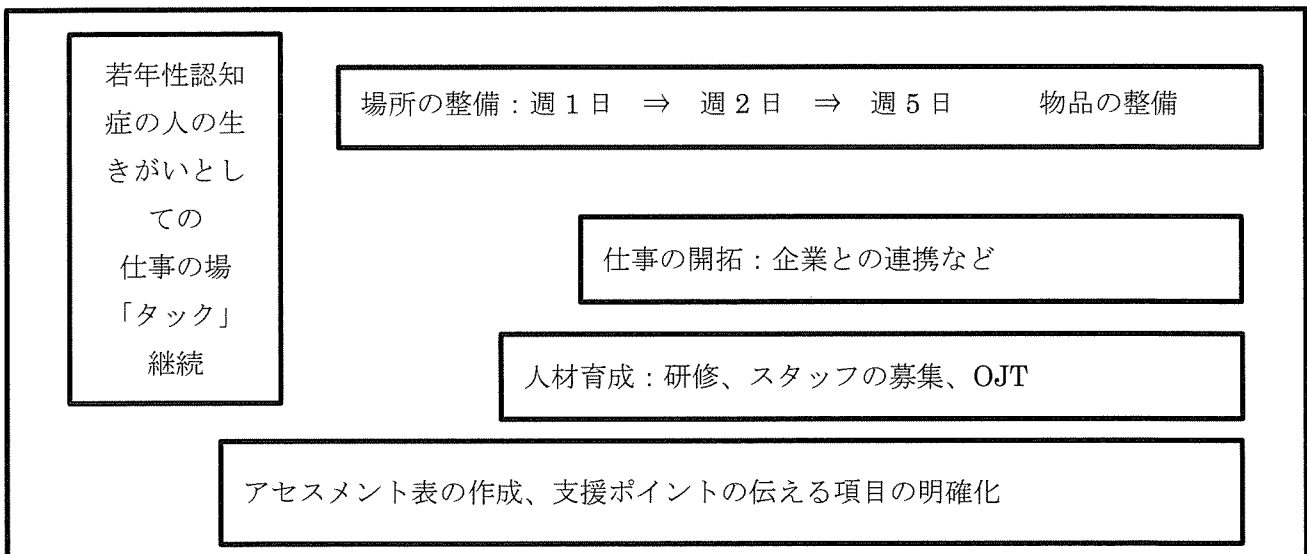
### 1) 目的

当法人は、若年性認知症や初期の認知症など公的支援が少ない対象を支援するために活動を行っている。これまでに、若年性認知症の人が介護保険サービスを利用しやすくなるためのアセスメントシートの作成や、若年性認知症の人のためのデイサービス立ち上げの支援などをおこなってきた。2015年には、若年性認知症の人を中心にした、生きがいとしての仕事の場「タック」を毎週2日行い、各実施日には6～11名の利用がある。「タック」の実施により、まだまだ残っている力を発揮し、一人で通えるようになったり、仕事への意欲が出てきた人もいる。しかし、参加人数の増加や、毎日活動したいという要望には答えられていない。また、「タック」での通いや作業が実施できるようになったことで、退職者の就業復帰、就労継続A型などへの移行を行ったが定着できなかった。

このため、若年性認知症専用の仕事の場が必要と考え、参加人数、開催日を増やすための居場所の整備、支援スタッフの育成を行い、この居場所を継続するための仕事を開拓したい。また、退職者の就業復帰、就労継続などへの移行をスムーズに行うためのアセスメント表を、「タック」の活動をもとに作成し(若年性認知症の人が仕事をするうえでの能力評価方法とサポート方法の明確化)、移行した事業所に適切なサポートを行ってもらえるようにしたいと考えた。

### 2) 事業の概要

2015年より継続してきた、若年性認知症の人の生きがいとしての仕事の場「タック」を継続することを目的に、場所の整備、スタッフの育成、どのような仕事ができるかのアセスメント、企業や就労継続事業所への支援ポイントの伝え方の明確化を試みた。



## 2. 事業内容

### 1) 居場所の整備と活動

#### ①目的

2015年から2か所で活動し、週2日の活動を行っていたが、実施日を増やし、多くの人が利用できるための居場所を団体事務所近辺に整備する

#### ②実施した内容

##### A. 新しい居場所整備のための検討会

日時：2016年8月12日金曜日 17時半～19時実施

参加者：家族5名（飯山、大谷、応矢、鎌瀬、松永、米澤、涌波）

スタッフ：6名（沖田、琴、杉原、白草、城山、中村）

- ・助成金をうけられるようになったので、生きがいとしての仕事の場「タック」を、週1回から週5回参加できるようにしたい。
- ・9月から実施した時に、週2回木・金 通える人は、どれくらい希望があるかの確認する
- ・11月～ 週4回月・水・木・金
- ・12月～ 週5回月～金と開始していきたい。
- ・来年3月末で、火曜日別の場所で行っている「中崎町タック」は中止とする。
- ・助成金の来年4月以降、就労継続B型として継続していくことも検討していく。
- ・就労継続B型と現在の違い
- ・ガイドヘルパーが使えない
- ・利用料と工賃が発生する
- ・準備として必要なこと 1日10人の利用者、1日3人スタッフ、お金
- ・やかん、なべ、時計、電気ポット、タオル、石鹸、マット
- ・連絡会の実施 家族代表2名

##### B. 事務所を借り、必要な物品を整備する

2016年8月より団体事務所近辺に場所を借り、机、椅子などを徐々に整備していき、認知症の本人たちも慣れるように新しい事務所へ往復を行った。

##### C. 活動の実施

生きがいとして仕事の場「タック」の活動を4月より週1回、前年度より継続していった。

9月より新しい場所で週2回実施とし、10月より週3回の実施とした。12月より週5回とし実施した。

実施日と参加人数は、4月から8月まで週1回、合計18日実施し、本人90人、家族10人の参加があった。1日平均参加人数は、本人は5人、家族は0.5人であった。

月別の1日平均本人の参加人数は、9月は4.7人、10月は4.5人、11月は3.8人、12月は4.8人、1月は4.9人、2月は5.2人であった。



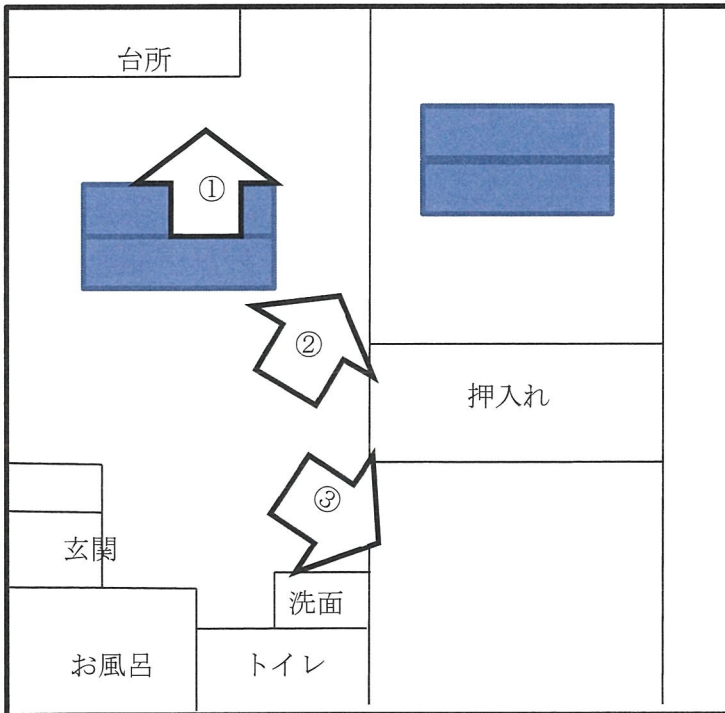
表1 月別の参加人数

期間	4月～8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
実施日数	18	9	11	12	16	17	20
本人参加人数	90	42	50	46	76	84	103
家族参加人数	10	3	8	4	3	5	15
本人平均参加人数	5	4.7	4.5	3.8	4.8	4.9	5.2

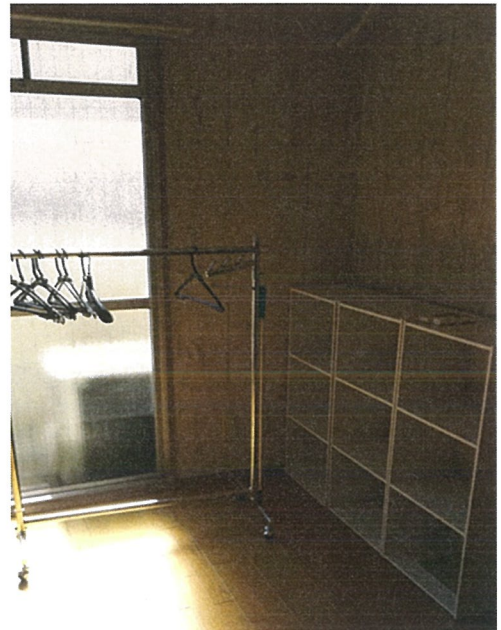
①



②



③



## 2) スタッフの育成

①目的 若年性認知症の人や家への理解を深めた人材を育成するため。

②実施した内容

A.研修の実施 平成 28 年 7 月～9 月

内容

日程	研修テーマ	内容
1 回目 2016 年 7 月 4 日(月)	若年性認知症の人と家族の 求める支援 本人、家族の声	若年性認知症の本人や家族から意見を聴きながら、求めている支援について考えます。
2 回目 7 月 19 日 (火)	支援制度の利用	若年性認知症の本人や家族のための支援は、介護保険の使い方にも工夫が必要です。また、障がい福祉制度や医療の活用方法を学んでいただきます。
3 回目 8 月 12 日 (金)	疾患別のケア	アルツハイマー型認知症の症状は、高齢者と異なる部分があります。また、高齢者では少ない前頭側頭型認知症についても、その特徴をふまえてケア方法をお伝えします。
4 回目 8 月 26 日 (金)	居場所作り 本人を中心とした場の作り 方、カフェ、デイサービス等	本人同士のコミュニケーションの促進のしかた、居場所の作り方についてお伝えします。
5 回目 9 月 2 日(金)	就労支援 家族支援 (子どもも含む)	在職している人、離職している人、それぞれの就労支援方法を紹介します。 また、学童期の子どもも含めどのように家族支援を行っていくか学んでいただきます。

上記の内容を、5 回の連続研修として実施した。

実施場所：大阪市社会福祉研修・情報センター 4 階会議室

時間：13 時 30 分～16 時 45 分

講師：1 回目 認知症の当事者、その友人、家族各 1 名、当法人代表理事

2 回目 当法人副代表理事

3 回目～5 回目 当法人代表理事

広報：案内チラシ 500 枚作成・配布先 地域包括支援センター職員、初期集中チーム員等

資料 1

ホームページにて掲載

大阪府、大阪市の介護保険課より若年性支援部署にメールにて配布依頼

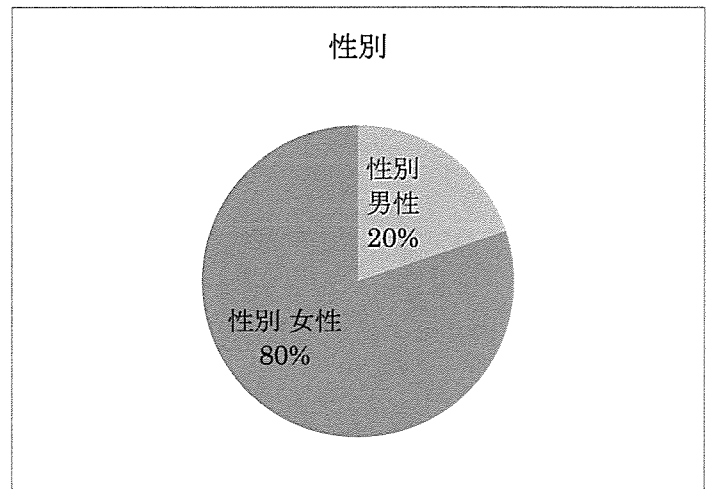
各種の研修にて配布



## 研修アンケート結果

### 1. 研修受講者

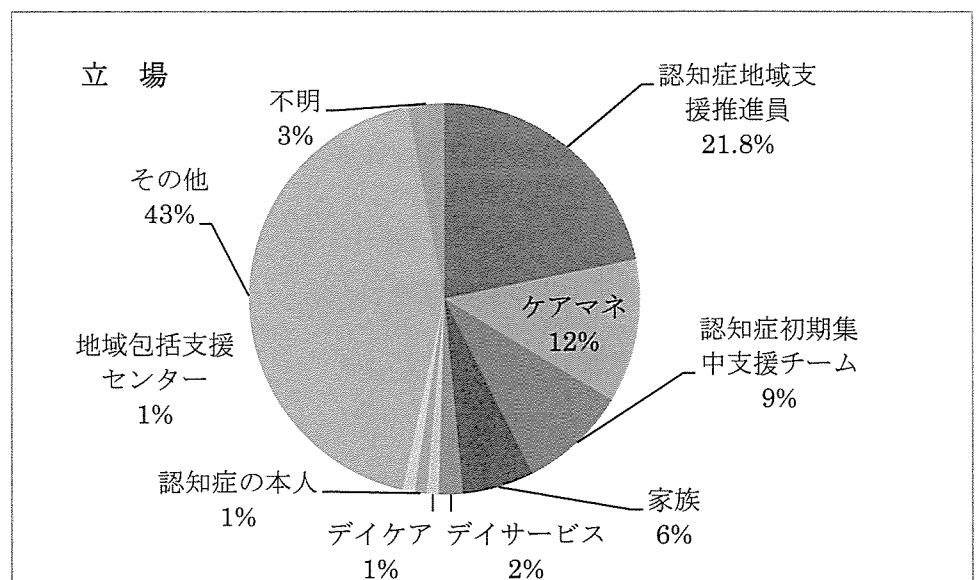
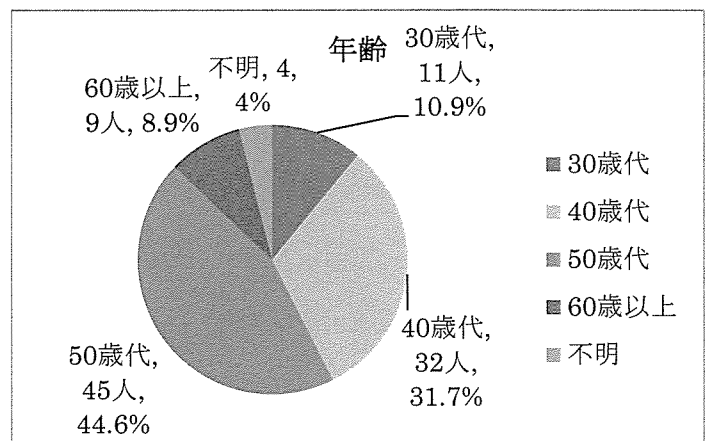
第1回「本人・家族の声を聴こう」の受講者は、24人であった。第2回「支援制度について」は、28人と受講者が最も多かった。第3回「疾患別ケア」の受講者は、21人であった。第4回「居場所づくり」の受講者は、26人であった。第5回「就労支援・家族支援」の受講者は、22人であった。5回連続受講者は、14人であった。



5回の研修を事項した人の総数は、121人であった。

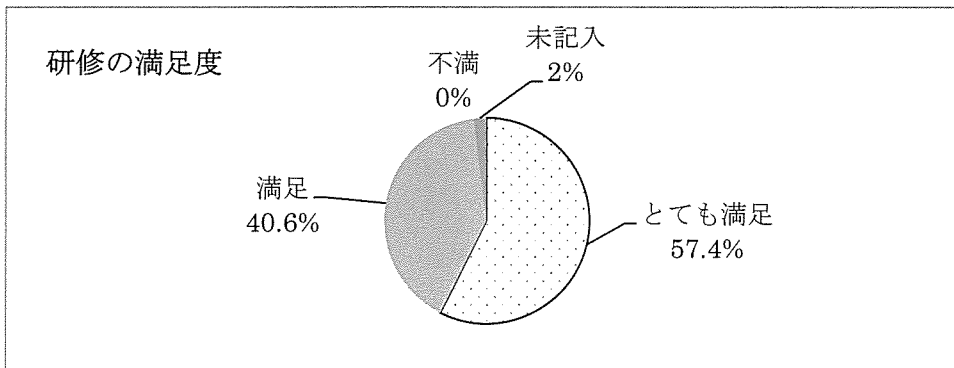
アンケートの回答者は、101人であった。

- ・ 男性が2割、女性が8割の参加であった。
- ・ 年齢は50歳代が最も多く44.6%、次いで40歳代が31.7%であった。
- ・ 立場別にみると、認知症地域支援推進員が21.8%と最も多く、次いでケアマネや認知症初期集中支援チームの受講が多かった。

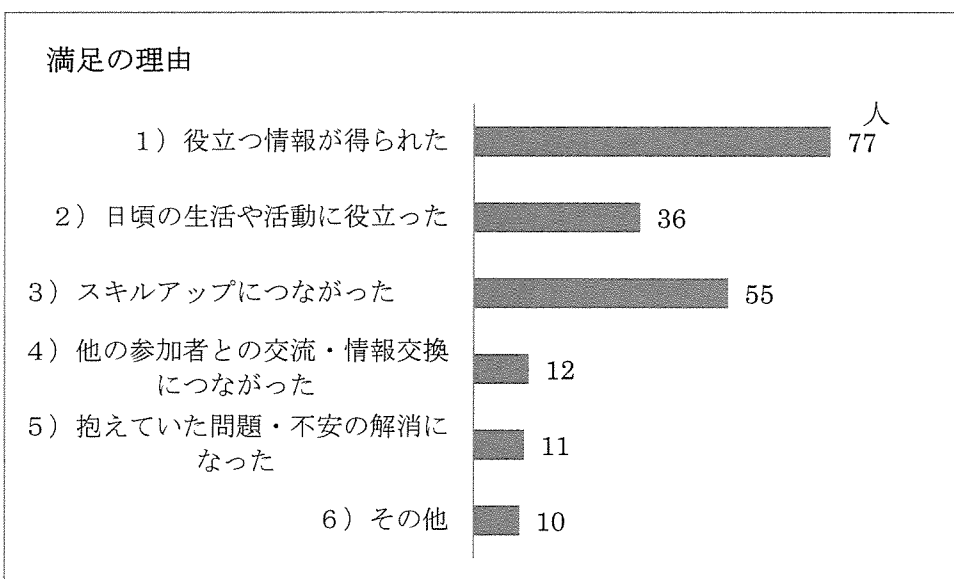


## 2. 満足度

・研修の満足度は、すべての研修が「とても満足」「満足」のいずれかであり、「不満」はなかった。

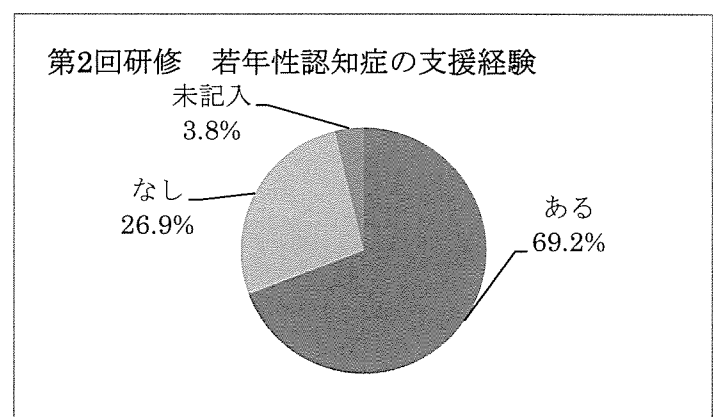
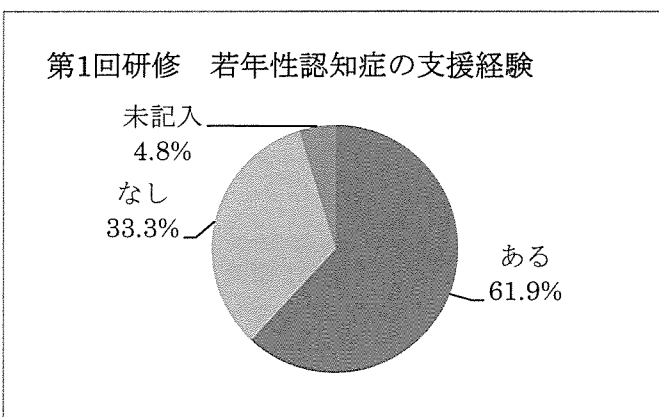


満足の理由として最も多かったのは、「役立つ情報が得られた」のべ 77 人が最も多く、次いで「スキルアップにつながった」のべ 55 人、「日頃の生活に役立った」36 人であった。



## 3. 若年性認知症の支援経験

第1回と第2回の研修では、若年性認知症の支援経験をたずねた。6割～7割の受講者が支援経験を持っていた。



#### 4. 若年性認知症の支援で困難であったこと

支援の上で困難であったことは、「制度利用」に関しては、手続きの煩雑さ、慣れないために上手く説明できない、65歳以降だと移動支援などが利用できないことなどがあげられていた。

また、「支援方法」に関して、本人のしたいことを優先できずデイサービスの決まりごとに合わせてしまうこと、どこまで援助したらよいかわからない、本人の思いを汲みとれないなどがあげられていた。さらに、男性利用者の場合、力が強く女性職員が怖がるなどの困りごともあげられていた。

「居場所がない」「経済的問題」など、既存の支援では解決困難なこともあげられてた。

#### 5. 各回の感想

第1回本人や家族の話を聴く回では、「若年性認知症についてお話を聞かせて頂きながら、こんなに笑顔になれるとは思いませんでした。『病気を笑える』っていう状態になりたいと思いました。」「若年性ということでマイナスのイメージばかり思っていた。友達の大切さ・若い世代なので友人も若く本人も若い。考え方の幅が広がった。受け入れると言う事は隠さない事・若年性の方の社会資源が少ない中、広い視野で区外・市外・府外の情報をつかまないといけないと思う。若年性の方は困難なのは間違いないと思うが、元気に明るく暮らすことも出来るんだと。大変という思い込みを払拭します」と、当事者の話を聴いてイメージが大きく異なった受講者が多かった。

第2回制度利用についての回では、すぐに介護保険を案内していただけたのが他の制度利用も考えていきたいという意見や、制度について知っていた人も整理ができたということであった。

第3回疾患別のケアでは、半数以上の人が疾患の違いを意識してケアしていることだが、講義により「FTDについて・レビーについてただ難しいという認識しかなかったが、本日の内容で知識も理解でき正しく認識できた。」という回答もあり、より違いを意識してケアできるようになったと考えられた。「アルツハイマー型か脳血管性の研修はよくありますが、前頭側頭型やレビー小体のことももっとくわしい研修をうけたい」という意見もあった。

第4回居場所については、「自分を解ってくれる仲間がいて嫌な思いをせず、それとなくサポートしてくれ、何らかの役に立っていると感じられる所」などがあればよいとあげられていた。

感想では、「しっかりと見極めて何気に支援する難しさ、改めて感じました。話の中でケアや観察のヒントをいっぱい出して頂けて明日からのケアにとっても役立ちます。」「自分の発想が少し広がった。」などがあった。

第5回就労・家族（子どもを含む）支援の回では、新しく学べたこととして、「若年性認知症のご家族のおかれている心境など・就労支援の大切さ」「本人・家族のつどいを支援しているものとして、進行して行く病で常に変化が生まれますが、専門職だけで話し合うのではなくご本人と一緒に話し合っていきたいと思います。」などの意見があった。

感想では「当事者の望んでいる事、思いをより深く知る。掘り下げる努力をする大切さを学ぶことができました。やはり5回受講して良かった。」反対に5回受けたかったという意見もあった。

今回は、視覚教材や実際に府内で活用している若年性支援ハンドブックを活用しての研修でイメージがしやすかった意見が多かった。

詳細は、資料2に掲載

## B.実践研修 平成 28 年 9 月～平成 29 年 3 月

タックを週 5 回実施するためにスタッフを募集し、実践研修を新しく整備した居場所、もしくは当団体事務所で行った。当初、連続研修の修了者からスタッフを募集する予定であったが、研修受講者はすでに認知症初期集中支援チームなどで就労していたので、修了者からはスタッフになる人材は望めなかった。

これまで、当法人の研修受講者などの中から 8 月～10 月スタッフとして雇ったが、定着が難しく、10 月よりハローワークで募集し、11 月より随時 3 人を雇用することになった。しかし、体調不良などの理由で退職したため、随時ハローワークで募集し雇用を行った。

このため、当初の予定の実施回数では十分な研修が行えなかったため、実践研修や現場と一緒に入って OJT を行った。

実施回数は、7 回の計画であったが、当法人代表理事と副代表で複数回に分けておこなった。

- ①沖田 (10/7、10/14、11/11、12/2、12/9、12/20、12/27  
12/22、1/6、1/13、1/27、1/31、2/2、2/21、
- ②杉原 (10/7、11/11、11/15、12/2、1/17、1/31、2/14、)  
2/7、3/14

内容は、講義として認知症について、疾患別のケアや若年性認知症の制度について大阪府若年性認知症支援ハンドブック及び連続研修資料などを利用し行った。利用者の状況を聞き、対応に苦慮したり迷ったりしたことを聴き、アドバイスをを行った。

### 3) 仕事の開拓

#### ①目的

居場所を継続していくための経済的基盤を整えるために、現在作成している製品の販売促進、参加者の募集。新しい仕事の開拓。

#### ②実施した内容

チラシの作成（製品の宣伝、参加者募集、仕事の募集）、チラシを持っての事業所、企業まわり 企業との連携を行う予定であったが、連絡会に参加した就労継続 B 型事業所などからの紹介により以下の内容の取組を行った。その後、その経験により今後の仕事の開拓のためにチラシ作成を行った。

##### (1) 販売先の開拓

##### a) 東京の雑貨屋での委託販売

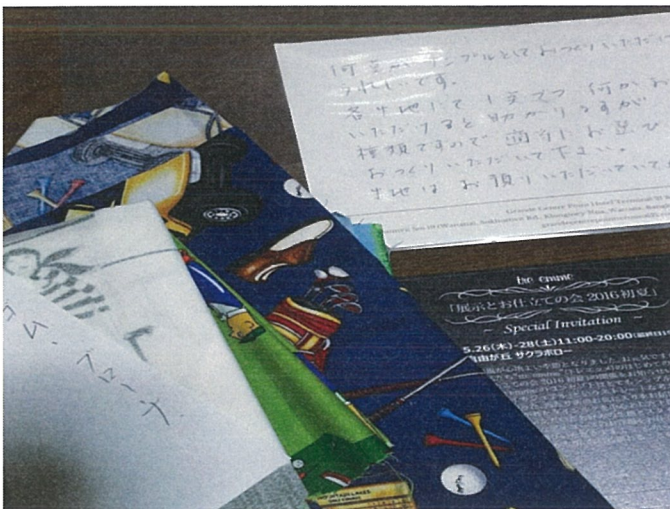
認知症ケア学会で活動を知ってくださった方の紹介で、東京の戸越銀座の瀬尾商店に委託販売で置いていただけることになる。代表理事やタックメンバーが厚労省の研究事業などで東京に行く時に、商品の入れ替えなどを行い、2016年9月～2017年1月まで委託販売を行った。



戸越銀座商店街の瀬尾商店にて販売

##### b) 東京の自作服飾業者からのくるみボタン作品の委託

自作でオリジナル服飾を実施されてる業者より、知人を通じてくるみボタン作品の依頼があり、その業者より布をもらい作成を行い、試作品を郵送した。





c) 喫茶店での委託販売

法人事務所、近隣の喫茶店での販売を委託し行った。



隣の喫茶店に、お菓子の横に置いてもらう。

d) ホームページでの販売

当法人のホームページ、face book を通じて販売のよびかけを行う。



販売の申し込みのあったものは、入金を確認して  
パッキングを行い郵送した。





e) 研修、学園祭での販売

認知症や若年性認知症の研修会などで販売を行った。



2017年6月認知症ケア学会でご本人も販売に参加

(2) 他の仕事の試行

a) ゼムクリップのケース詰め

本事業連絡会に参加した就労継続B型事業所より内職を紹介してもらっているというアイールコーポレーションさんを紹介してもらい、100均で販売しているゼムクリップのケース詰めを体験させてもらう。



アイールコーポレーションの職員さんに、内職の方法をスタッフ、メンバー共に教えてもらう。

b) ホットナイフでの作業

アイールコーポレーションさんの紹介でホットナイフ（300度のナイフ）を利用して化繊の旗などをカットする仕事の紹介を受け、メンバーさんと染色会社に出向き、作業内容を確認し、新しい作業場で定規などを借りて試してみる。



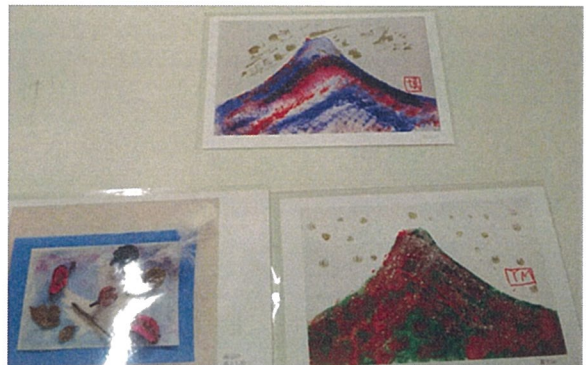
化繊の旗などにホットナイフを当てて熱でカットしていく作業

c) アートワーク作品の商品化

これまでも当法人で行ってきたアートワークの作品を、本人・家族交流会などで作成し、ハガキやエコバックに加工して商品化を行った。



アートワーク作品を描いているところ





d) 珈琲で絵や字を書く取組み

絵手紙の指導をしている方に来てもらい、珈琲を利用し絵手紙などを書くことを試みる。



e) キッチンを借りて調理の試み



認知症カフェを実施している場所をお借りして調理師の経験のあるメンバーと一緒に調理を試みる。



f) 就労継続 B 型事業所にて作業体験

連絡会に参加してもらった近所の就労継続 B 型事業所ネクストドアにスタッフとメンバー2名行き、作業の体験を行う。

また、別の調理や接客を行っている、就労継続 B 型事業所に調理師だったメンバーと仕事の内容を聞きに行く。

g) オリジナル缶バッジの作成



認知症サポートの啓発物品としてオリジナルのくるみボタンを依頼されたが、アイロンプリントが難しい柄と考えられ、依頼先とも相談して缶バッジの作成で試みた。

手書きの風合いがアイロンプリントでくるみボタンに作るのに向かないため、依頼先と相談し缶バッジで作成した。

平野区認知症キャラバンメント連絡会事務局の依頼で作成

(3) 仕事開拓の検討会

第1回 2016年6月17日(金) 午後7時～8時

出席者：琴、白草、杉原、沖田

タックの現状

- 1) 現在、参加者8名で、これ以上増えると1人では対応が難しい。
- 2) 2階のサポートセンターの電話やコールセンターの電話の対応をせざるを得ない時もありタックに支障をきたす事もある。
- 3) 参加費を徴収するのなら、見学者が来られる時は、それなりの対応が出来るスタッフの配置をしないとイケないと思う。

今後の課題

- 1) 主に玉造タックで、くるみボタンの仕上げをするが今後も、琴さんと連絡を密にして(くるみボタンの数・種類・布選び等)、ロスが出ない様に作業を行う。
- 1) 完成品が少し皺が寄ったり、マカロン仕上げにズレがあつたりの商品を定価より安くして売ったらどうか?・・・この案は当事者とも話し合いそうした方がいいとの意見でした。

第2回 2016年10月14日

出席者：琴 白草 松永 三輪 沖田 杉原

1. 今後のタックの動き

- ・11月から週4日開所(月、火、木、金) \*12月から週5回
- ・体制 月・・・白草さん  
火・・・  
木・・・白草さん、三輪さん

金・・・白草さん、松永さん、(三輪さん AM)

ハローワークに求人を出す予定(17日) -8時間 9:30~17:30

## 2. スタッフの役割分担

全体・・・白草さん

毎回の作業内容を決める・・・白草さん

1週間の計画をたてる・・・白草さん

個別サポート・・・松永さん、三輪さん

作業の内容を決める・・・白草さん

販売の商品をそろえる・・・白草さん

ネット販売・・・松永さん(詳細は次ページ)

◎タックで携帯電話を購入し、休みの連絡は携帯にしてもらう

◎タック利用の説明書を作ったらどうか(初回に渡す)

## 第3回 2016年12月2日(金) 16時~17時

出席者: 琴 紺谷 中川 村井 沖田 杉原

### 1. タックのスタッフ体制

12月から週5日 開所

出勤 9:30~17:00

### 確認事項

- ・朝は事務所に寄り、マンションの鍵と記録を持ち出す
- ・10時に玉造駅で待ち合わせるスタッフと事務所待機のスタッフと分担する
- ・帰りは、記録を記入し、マンションの鍵をかけ、事務所に戻る
- ・タイムカードは出勤した時間を手書きで記入し、外出に伴う交通費なども記入をする

### 4. タック見学者について

11月 11日(金) 池田さん?

11月 25日(金) 松尾さん(東淀川区社協)

### 5. タック記録の件——沖田さん作成

### 6. Sさんの火曜日の仕事(作業)

### 7. 販売商品の置場所と商品の分け方など

◆当面の販売予定は、ホワイトボードに書く

白草さんに伝える(数、日、セットしてほしい締切など)

- ・11月6日(日) 販売—白草さん、琴さん

◆販売の形態

- ・手売り——販売伝票
- ・委託販売——販売伝票とそのコピー（キッチンマツシタ、東京など）
- ・ネット販売——下記、三輪さん担当

◆ネット販売の流れ——三輪さん担当

- ①HP、メールを毎日チェックする
- ②申し込みがあれば、メールで返信する。  
その際メールに振込先、請求金額を入れておく  
同時にそのメールを上田さんに転送する
- ③上田さんが入金確認をする（火曜日）
- ④販売伝票を作成する
- ⑤くるみボタン、納品書を送る（ゆうパックで）※10円切手を貼る  
※商品のセットは三輪さん or 白草さん？

8. タイムカードと賃金支払いについて

- ・毎月月末に時間と交通費を記入したものを事務所に提出
- ・タック以外の外出は、交通費と時間を記入
- ・履歴書、契約書



#### (4) 結果：仕事の開拓を試みて

販売は、一番認知症や若年性認知症の研修会での販売が、継続して行いやすく買ってくれる人も多い。毎回ではないが、本人が販売に参加することもでき、メッセージをつたえやすく、本人も作っているばかりでなく販売することで仕事の意味を見いだせる。

ホームページでの販売は、少量の購入者の場合は、梱包や入金確認など手間がかかる。梱包やホームページの更新などの作業もメンバーと共に行えるかなどの課題がある。

委託販売は、遠方であると協力者がいないと委託先を見つけられない、商品管理の問題などがあるが、委託先を見つける努力は必要と感じる。

他の仕事の試行として、ゼムクリップやホットナイフはメンバーだけでは完成度が低かった。スタッフの指導が不十分であったと考える。スタッフ自身もその作業に慣れておらず、細かい気配りができていなかったことで完成度が低かったと考えられる。また、メンバーも内職仕事で簡単なこと、あまりやりたくないことで早く終わらせようと、スピードだけを重視するような面があった。やっていることに意味が感じられていなかったのではないかと。個人の能力に合わせた仕事分担もできていなかったように思う。内職的な仕事を実施する場合は、スタッフが作業のコツをつかんで実施できるようになることや、メンバーのモチベーションの維持、作業能力のアセスメントが必要と考えられる。

アートワーク作品の商品化は、ハガキやエコバックは今後も取り組めそうである。コーヒーの絵は、香りを楽しむためには、実際に書いたものを販売した方がよく、同じものを何枚も書くのは認知症の人には難しく、量産は困難と考えた。また、アートワークのように確立された手法の中での工夫はしやすいが、珈琲の作品のように自由度の高い者は描いていくのが困難であった。

調理は、調理師だったメンバーがやる気を出してもらうために行ったが、借りたキッチンがIHだったこともあり、慣れていないために得意のオムレツがなかなか作成できなかった。

就労継続B型の事業所での作業体験は、スタッフがついていったので可能であったが、本人に付き添っていく者がいないと継続は困難な状態である。また、これまで行っていた調理という仕事であっても慣れるまで（思い出すまで）の時間が必要であったり、受け入れ事業所の場所や条件、他の障害者の人との関係性が取れるかなどの課題があり、すぐに事業所への利用に結びつくことは難しい状況であった。

また、仕事の試行の中で課題と見えたことは、認知症の人自身の「感情的な揺らぎ」が、継続して通ってくることやスタッフとの関係を難しくしていた。メンバーが帰ってから家族に、スタッフが指示的である、自分の目の前の物を何も言わないで取っていった、今日は人が多くて居る所がなかったなど話していると報告を受けた。スタッフの何気ない言動に、メンバーが激怒する場面や、スタッフに「おまえもゴミや」「おまえも認知症や」と言うこともあった。

これらは、記憶の混乱や自信がないことを示しているのではないかと考えられ、できるだけ本人にスケジュールや手順などがわかりやすく、モチベーションも継続できるようなサポートが必要であると考えられた。当法人の理事が関わると本音が聴けることもあり、被害的な言動の中に隠れた本音を引き出せるような、スタッフとの関係づくりも必要であると考えられるが、それには経験が必要であろう。

当法人が、10年くらい養ってきたことをハローワークで雇ってすぐのスタッフには困難であったと考える。スタッフからはメンバーに対し「怖い」「こんな時どうしたらよいかわからない」という相談もあり、若年性認知症の特に男性の利用者がデイサービスで利用を断られることと同様のことが聞かれた。

これらの事は、若年性認知症の人が介護保険サービスや、障害の就労支援でも同様の壁にぶつかるのではないかと考えられることであり、今後の課題である。

#### (5) チラシの作成と配布

前述の試行をふまえて、チラシは、参加者募集チラシ、商品と一緒に梱包するハガキ大のカード（参加者及び仕事の募集）、商品の宣伝と仕事の募集を兼ねたチラシの三種類を作成し、今後も使用するものとした。

チラシの配布先：府内の認知症専門医療機関、地域包括支援センター、初期集中支援、研修受講者など

資料3 参加者募集チラシ、参加者及び仕事の募集カード（商品と一緒に梱包）、  
商品の宣伝と仕事の募集を兼ねたチラシ

## 4) アセスメント表の作成

### ①目的

「タック」参加者の作業や参加状況から、仕事のための能力をアセスメントできる表を作成し、企業や就労継続事業所への支援ポイントの伝えられるようするため。

### ②実施する内容

A. 作業療法士に「タック」の場に参加し、アセスメント表作成のためのフィールドワーク  
フィールドワーク 10回  
実施場所：大阪市北区社会福祉協議会、団体事務所、整備する居場所

B. 作成のための検討会を実施

作成のための検討会 3回

#### 1回目

日時：平成28年10月20日（木）10:00～11:40

場所：大阪府障害者職業センター

参加者：沖田裕子、松村智子、竹内さをり

内 容：

1. 事業内容の説明

2. 職業関連のアセスメントについて

1) 既存の様式

①就労移行支援のためのチェックリスト 活用の手引き

Ver.違いで、企業就労継続のためのチェックリストもある

⇒この中身だけでは、どのような段階（側面）があるのかが分かりにくいので、『職業準備性ピラミッド（A4用紙1枚で図説）』を作成

2) 職業センターで実施している評価道具

①ペグを用いたもの

直径1cm程度の円柱（長さ10cm程度）で、半分が赤色のもの（複数）を用いて、刺さっている穴から指示した規則の穴へ順に移し替えることができるか？

高いレベルでは、指示した方向へ回してひっくり返し、赤から色なしへ変えていく。

途中から差し替えるように伝え、差し替えが終わった時点で、どこから差し替えたのかを問う。

この際、口頭指示や模倣など、どの指示が入りやすいか、必要かを確認。

②細いペグとワッシャー

釘状のペグが複数、穴に刺さったものを用いて、中央の棒に複数刺さっているワッシャーをペグ1つ1つに入れて、別の穴に差し替える

3) 聞き取り評価

自己理解と対処方法を知るために実施

①MSFAS 幕張ストレス疲労アセスメントシート

(MAFAS の活用のために、ネットで検索できる)

②をバージョンアップしたもの

②M-ストレス就労アセスメントシート

統合失調症の方のためのもの

③MWS 活用のために 職業的作業の評価

中には、本人の興味関心のある活動を選択する項目があり、本人、家族、支援者に本人が興味のあるものを選んでもらう。

本人は、後からこだわらない人や勢いだけで物事を選択する人もいるので、必ず振り返りを行い、何故それを選んだのかなど、確認を行う。

家族や支援者が選んだ本人の興味のある活動と食い違いがあることも多いため、本人の自己認識度合を見ることもできる。また、対処方法について知ることができる。

4) その他評価

①TEG エゴグラム (TEG II)

「交流分析」という人間関係の心理学理論に基づいて作られた性格診断テスト。

人の性格を5つの心の領域 (CP・NP・A・FC・AC) に分けて分析

②一般職業適性検査 (GATB)

複数の課題から、職業適性の評価が行える。

かなり高度で認知力を要する課題が多い。

③TO-DO リスト

記憶障害のある方に用いている

**2回目**

日時：平成29年1月19日(木) 10:00~11:50

場所：大阪府障害者職業センター

参加者：沖田裕子、松村智子、竹内さをり

内 容

1. 前回打ち合わせ内容の確認

2. 評価について

1) 既存の評価の確認

「シューカツノート」：知的障害の方が自分でつけられるもの

「ジョイント活動評価表」：作業活動への行動特性や対人関係、外来通院に関する評価の視点がある。専門的な視点のため、今回想定しているスタッフがこのまま利用するのは難しい。

2) 今回作成予定のアセスメント表

上記2点の評価表の要素をミックスして、実際に必要なものを検討して抽出する。

現場で竹内が観察した要素も含める。

就労移行のためのチェックリストの要素も含める。

### 3) 評価表の使用者

スタッフが主につける。

スタッフがつけたものを、本人と確認する、本人がつけたものとの相違を見ることで、自己認識向上につながる。・・・面接、相談対応的な要素も含まれるため、現場スタッフでは難しい。

### 3) その他

次回（3回目）の話し合いでは、ある程度2）のまとまったものを用いて相談していきたい。

**3回目** 2017年3月10日9:30～11:30

参加者：沖田裕子、杉原久仁子、竹内さをり

実施場所：団体事務所

内容：

ある程度のまとまったものを事前にメールで送り合い、持ち寄って分析し、アセスメント表としての形を確定していく。

### ③方法

フィールドワークの内容から、くるみボタン作りの行程や、タックで行われていることの作業分析の内容を書きだし分類した。また、障害者職業センターで使用されている資料や報告書、参考文献から、支援に必要な項目を書き出し分類した。その内容を、専門職が若年性認知症の人の就労等の支援を行う時にチェックすべき内容を次の3種類のアセスメント表に整理した。

A. ジョブベース…就労に必要な基本項目

B. くるみボタンの行程表…タックで行われているくるみボタンの作業を基本に、作業能力などをアセスメントするための表

C. 居場所や作業の場づくり…居場所作りの基本として見えてきた項目

参考にした文献：

MSFAS 幕張ストレス疲労アセスメントシート

「シューカツノート」：知的障害の方が自分でつけられるもの

「ジョイント活動評価表」：若年性認知症サポートセンターで使用している物  
職業準備性ピラミッド

就労移行のためのチェックリスト

M-ストレス就労アセスメントシート

若年性認知症の就労継続に関する研究Ⅱ

L A S M I（精神障害者初回生活評価尺度）

#### ④結果

##### A. ジョブベース

ジョブベースづくりとして、障害者のための就労準備の表などを利用して、次の7項目をあげた。

1. 健康管理・病気の管理、2. 生活習慣・生活リズム、3. コミュニケーション・人間関係、4. 基本的労働習慣、5. 職業適性、6. 通所・通勤、7. 家族の協力に分けられた。

それぞれの下位項目は次のようにあげられた。

##### 1. 健康管理・病気の管理

- 1) 定期的な通院をして病状が安定している
- 2) 服薬管理ができる、サポートがあればできる
- 3) 自分の障害・症状の理解をしている
- 4) 不安感がなく、気持ちが安定している

##### 2. 生活習慣・生活リズム

- 1) 睡眠が十分とれている
- 2) 生活リズムが整っている（起床など）
- 3) 季節に応じた服装ができる、サポートがあればできる

##### 3. コミュニケーション・人間関係

- 1) 協調性がある
- 2) 共同作業ができる
- 3) 感情のコントロールができる
- 4) 意思表示ができる
- 5) 就労の場、仲間になじむことができる
- 6) 自分から周囲の人に話しかけることができる
- 7) 仲間への気遣いができる
- 8) 困った時にまわりの人に聞ける

##### 4. 基本的労働習慣

- 1) 就労の意欲がある
- 2) 作業意欲がある
- 3) 持続性がある
- 4) 働く場のルールを理解している
- 5) 危険への対処ができる
- 6) 作業態度が真面目である
- 7) 仕事の報告ができる
- 8) 忘れ物をしない、あっても対応できる
- 9) 安定して通所・通勤ができる



## 5. 職業適性

- 1) 1日のスケジュールが理解できる
- 2) 就労能力の自覚（作業適性・量）
- 3) 求められる作業速度がある
- 4) 能率の向上を目指すことができる
- 5) 作業の指示が理解できる
- 6) 作業の正確性がある
- 7) 作業環境変化に対応できる

## 6. 通所・通勤

- 1) 交通機関を利用して遠方から一人で通える
- 2) 電車の乗り換えに対応できる
- 3) 駅から就労場所まで歩いていくことができる
- 4) 道がわからなくなり迷っても対応できる
- 5) 外出しても一人で帰ることができる
- 6) 信号など交通ルールを守ることができる

## 7. 家族の協力

- 1) 本人が働くことに同意している
- 2) 本人の症状、障害特性を理解している
- 3) 必要な際、通勤などのサポートができる
- 4) 就労上のリスクについて理解できている

障害者の就労支援としてあげられていた以下の項目は、すでに社会人として就労経験のある若年性認知症の人の、就労支援の項目としては、すでに満たされたいと考えられる以下の項目は削除した。

身だしなみ、金銭管理、起床、体調不良時の対処、欠勤時の連絡、あいさつ、会話、言葉づかい、社会性（生活の中のルールを守る）

先の項目に必要な支援などを記入できる形で表を作成した。

作成表は資料4に示す

## B. くるみボタンの行程表

フィールドワークに複数の日程の中で行われて作業分析の内容から、時系列に作業を整理し、内容、工程、難度と作業要素を示した。

作成表は資料5に示す

### C. 居場所や作業の場づくりとして見えてきたこと

「1. 適切な場づくり」「2. 記憶や認知障害へのサポート」「3. やる気へのサポート」「4. チームとしての課題の解決」「5. 作業選びの基準」「6. 家族との連携」「7. 適所へつなぐ」の要素があげられた。

作成表は資料6に示す

各内容について以下に述べる。

#### 1. 適切な場づくり

「1. 適切な場づくり」では、下位項目として以下の内容があげられた。

- 1) 年齢幅、年代の選択、2) 場所の広さ、3) 座席位置
- 4) 適切な休憩時間
- 1) 年齢幅、年代の選択
- 2) 場所の広さ
- 3) 座席位置
- 4) 適切な休憩時間

若年性認知症といっても、40歳代、50歳代の

#### 2. 記憶や認知障害へのサポート

- 1) 計画性を持つ
- 2) スケジュールを毎朝確認する
- 3) スケジュールがわかりやすいように工夫する
- 4) シンプルでわかりやすい説明をする
- 5) 前回までの作業を思い起こせるようにする
- 6) 各自が作業を選択できるようにする
- 7) 作業しやすいように整理整頓する
- 8) 説明は視覚的にホワイトボードや紙に書き確認
- 9) 言語障害への配慮をする

#### 3. やる気へのサポート

- 1) 本人が工夫できる仕事の渡し方をする
- 2) 本人のアイデアをくみとる
- 3) 本人の障害特性を把握し、適した作業を渡す
- 4) 本人の認知症における心理的ダメージを理解する
- 5) 作業の一体感を作る
- 6) その場に応じて柔軟に対応する
- 7) 指示的に感じられないように決定までを導きだす
- 8) 終了時も確認を行う
- 9) 主役は本人たちである、スタッフは黒子、でも楽しむ

10) 何らかの形を通して社会とつながっている仕事である

#### 4. チームとしての課題の解決

スタッフが課題と思ったことをチームで解決する

#### 5. 作業選びの基準

- 1) 分担が出来る
- 2) 多くの人ができることを見つけられる作業工程がある
- 3) 参加者全員で同じ作業が出来る
- 4) 作業管理しやすい (シンプル)
- 5) 出来上がりがわかりやすい
- 6) 作業者のアイディア、創造性が活かせる
- 7) 仕上がりに満足感がある
- 8) 作業自体が社会的な意味をもつ
- 9) 認知症の人が作成する意味がある
- 10) 何らかの形を通して社会とつながっている仕事である

#### 6. 家族との連携

- 1) 通所に関する連絡
- 2) 家族の不安をチームで解決する

#### 7. 適所へつなぐ

- 1) 認知症のステージに合わせた居場所へつなぐ
- 2) デイサービスの集団の場になれるまでのサポート

#### ⑤今後の課題

作成したアセスメント表に、タック利用の前に使用しているフェースシートを改変したものと、これまでに当法人が関わって作成した社会資源の利用を促すためのシートと合わせて若年性認知症の支援のためのアセスメント表として作成する。

今後は試行してアセスメント表の実用性を確認したいと考える。

## 5) 連絡会の開催

①目的 事業の進捗確認や支援ケースの検討のため連絡会を開催する

②実施する内容 事業の連携団体を含めた連絡会  
事業の進捗確認や支援ケースの検討

③実施日（期間）平成28年4月～平成29年3月末  
第1回連絡会 2016年10月14日 15:00～16:30  
第2回連絡会 2016年12月16日（金）15:00～16:30  
第3回連絡会 2017年2月17日（金）15:00～16:30

### ④会議録

第1回 連絡会 2016年10月14日 15:00～16:30

出席：高瀬（障害者就業・生活支援センター）

寺田（なにわ工房）

寺田・金（ステージケア）

涌波・川添（家族）

沖田・杉原（当法人）

欠席：松村（障害者職業センター）、竹内（甲南女子大学）

1. 自己紹介を行い、当法人沖田代表から挨拶と本助成の説明があった。

2. 連絡会の役割について

当法人代表の沖田から連絡会の役割などの説明があった。

①目的 事業の進捗確認や支援ケースの検討のため

②実施する内容 事業の連携団体を含めた連絡会  
事業の進捗確認や支援ケースの検討

③実施日（期間）平成28年4月～平成29年3月末

④実施回数 3回

⑤実施場所 自団体事務所

⑥対象者・数 連携団体より3名  
若年性認知症の人の家族より2名  
障害者支援施設などより3名  
自団体2名

⑦スタッフ構成 事務局スタッフ2名（資料作成、記録）

3. 事業の説明と進捗状況

当法人の沖田、杉原から以下の項目について説明をし、出席者の意見交換を行った。

#### 1) 居場所の整備と活動

##### (1) 目的

現在は2か所で活動し、週2日の活動であるが、実施日を増やし、多くの人が利用できるための居場所を団体事務所近辺に整備する

##### (2) 現状

8月より賃貸契約し、整備をすすめる。9月より木曜、金曜の利用を開始している。11月から週4日、12月からは週5日の開所を予定している

#### 2) スタッフの育成

##### (1) 目的

若年性認知症の人や家への理解を深めた人材を育成するため

##### (2) 現状

連続研修は終了

スタッフの整備途中

OJTによる実践研修はこれから スタッフがそろい次第

#### 3) 仕事の開拓

##### (1) 目的

居場所を継続していくための経済的基盤を整えるために、現在作成している製品の販売促進、参加者の募集。新しい仕事の開拓。

##### (2) 現状

仕事の内容

これまでの仕事（くるみボタンを使った作品の製作）

今後、本人たちが作成したアートワーク作品のはがきや、エコバック作成予定

販売

研修や学会、学園祭で販売予定。

東京の雑貨屋さんで販売。洋服の自主製作をしている人の要望で伴布で髪留めなどを作成。

参加者の募集

相談業務から新しい参加者が増えている

若年性認知症コーディネーターが知られていない。まだ繋がれてない人がいるのでは？

#### 4) アセスメント表の作成

##### (1) 目的

「タック」参加者の作業や参加状況から、仕事のための能力をアセスメントできる表を作成し、企業や就労継続事業所への支援ポイントの伝えられるようするため。

##### (2) 現状

A. 作業療法士に「タック」の場に参加し、アセスメント表作成のためのフィールドワーク

10月より10回開始予定

B. 作成のための検討会を実施 3回

アセスメントの内容

1. くるみボタン、はがき、エコバック作成の作業分析

- 1) 作成から商品袋づめまでの行程の明確化
- 2) 誰がどこまでできるのか

2. 仕事が継続できる条件の明確化

本人

- 1) 職場に通う
- 2) 職場仲間との関係づくり
- 3) など

職場

- 1) 認知症状への配慮
- 2) など
3. 障害者職業センターで行う評価との連携

意見交換の内容

- ・事業所開設当初は他の作業所や家族会からお金を借りて運営を行った
- ・新しく場所を借りる時、地域住民とのコンフリクトがあった
- ・ハローワーク、社協の人材センター、学生のインターシップなどを利用してスタッフの募集をしたら良いのではないか
- ・認知症の人と他の疾患の人が一緒に働く場合は、認知症に対する理解が必要であった。例えば、覚えられないことに対して、他の疾患の人から「前説明したのにできない」と批判があがるようなことがある
- ・作業の流れがわかるように1つ終わったら紙をめくる方式のものも良い
- ・仕事は昔はツテの紹介を頼っていたが、大阪知的障害者雇用促進建物サービス事業協同組合（愛称：エル・チャレンジ）のような組織があり、仕事を見つけることはそう大変なことではない。
- ・販売、企画などを得意とする人たちに相談をしたらどうか。
- ・メンバーの通所手段（方法）が課題である。
- ・スタッフはアルツハイマー、前頭側頭型など疾病に合わせた関わり方ができることが必要である

4. 今後のスケジュール

連絡会の役割を再確認し、今後のスケジュールを決めた

第2回連絡会 12月16日（金）15時～

第3回連絡会 2017年2月17日（金）15時～



第2回 連絡会 2016年12月16日 15:00~16:30

出席：高瀬（障害者就業・生活支援センター）

寺田（なにわ工房）

寺田・金（ステージケア）

松村（障害者職業センター）

涌波・川添（家族）

沖田・杉原（当法人）

スタッフ 紺谷、村井

欠席：竹内（甲南女子大学）

1) 居場所の整備

課題

・どのように道を覚えてもらうか、まだ待ち合わせ場所に一人で来られない人もいる。

ご家族より

・移動支援を利用しているが、ご本人が行く気にならないことがある

→言葉でなくて写真やロゴマークを見せては？

→全体写真などを見せてみる

もし就労継続B型にするのなら、現在賃貸している物件では規定の広さが不足している。

引越しについて、各参加者の経験から

・パソコンの環境を構築するのが大変

・事前に説明会を何度かして、利用者の方に理解してもらう（参加は利用者のみ）

・事前に何度か一緒に行くなどしてそれほど問題はなかった

・新しい施設のルールを決め、新しい施設に入ってから説明する

・トイレが和式で大変だった

2) スタッフの育成

(1) スタッフからの意見

・どのように個人に接していけば良いか知りたい

・就労継続支援事業所の経験があるような方の話を聴きたい→ステージケアに見学に行く

(2) 研修について、各参加者の経験から

・就労に関しては順番に参加し、その方が内部研修を行う

・時間的に難しい事が多く、職員のレベルが上がりにくい

・十分ではない

・新入職員に対してのメニューが用意されているわけではない OJT が主である

・デイケアなどに参加しイメージを持ってもらう 全体像を持ってもらうようにしている

・受け入れも行っているため互いに助け合うイメージ

・就ポツでは日ごろの付き合いをもとに、さまざまな機関に研修を受け入れてもらっている

3) 仕事の開拓

## 現状説明

- ・ これまでの仕事も継続しながら、認知症の人だからこそ作製できるものを模索している
  - 珈琲で絵手紙の先生に来てもらう
- ・ 缶バッジの作成を新たに行う
- ・ 別の就労継続B型から意見をもらう
  - 例) オフィス街に喫茶店 いろいろな仕組みを考えておられる 中川氏
    - ◇ 認知症の方しかできない製品を推奨される
    - ◇ 社会へのメッセージ 忘れやすい方への便利商品等
    - ◇ 自主製品の競争力は低いことが多いことを指摘される
- ・ くるみボタンの作製、販売は継続していきたい。何かメッセージ性を持たせたい。
  - メッセージカードを入れる。くるみボタンや缶バッジにメッセージを入れる。
- ・ 認知症地域支援推進員は、若年性認知症への支援
- ・ カフェに参加してもらって意見を伺う

## 作業について スタッフから

- ・ ゼムクリップ作業については慣れが必要な利用者がある
- ・ 作業的には問題ない
- ・ 競争力のある商品の開発が重要ではないか

## 通所の意味

### 委員から

- ・ 社会的に受け入れられる商品であれば作る側の意欲も上がる
- ・ 生活リズムを整えるなどの目標をもって、その手段としての内職という位置づけ
- ・ 内職のほかに体を動かすことが好きな利用者もおられる
- ・ 障害特性によっても異なる

### 家族

- ・ 何のために行くのか問われると困る
- ・ 仕事としての位置づけだがなかなか通じない
- ・ まずは通って落ちついて作業することが目的

## 4) アセスメント表の作成

- ・ 作業療法士にタックに参加してもらい、フィールドワークを進めている
- ・ 誰がどこまでできるのかを明確にすることで、日々の役割を明らかにする
- ・ 目標、条件、職場の仲間、外部の当事者との関わり
- ・ エゴグラムの活用も考慮に入れる
- ・ 評価時、作業理解や作業態度を含めた持続力などを評価することで企業にもアピールしやすい
- ・ 就労経験のある方とない方への評価の違いがあるのではないか

- ・ これまでの就労経験をどう新しい仕事に繋げていくかが困難であることがある
- ・ 自分のしていた仕事へのプライドをどうしていくか
- ・ 実際にしてもらおうとできないこともある
- ・ 就Bから他の事業所に行かれる場合もある。作業中心だけでは合わない方がいるのではないか
- ・ アセスメントがあることでニーズを掘り起こすことができるかもしれない
- ・ 目標が高すぎる方もおられるので、目標の変更をなす必要もあるか（週5日通うことができる等）
- ・ 言葉だけでニーズは把握できない場合がある

#### 質問 家族から

言語療法士には来てもらえるのか？

別料金で来てもらうことはできるかのしれない。一対一で効果は認められる場合もある。

#### 第3回 連絡会 2017年2月18日 15:00～16:30

出席：高瀬（障害者就業・生活支援センター）

寺田（なにわ工房）

寺田・金（ステージケア）

涌波・川添（家族）

松村代理 岡野（障害者職業センター）

竹内（甲南女子大学）

沖田・杉原（当法人）

#### 1. 事業の進捗状況（1月以降）と今後の方向

##### ・スタッフの育成

ハローワークで紹介受け就職してもらった人が、急に就労継続できなくなった。

フルタイムでないパートの人を複数雇い、3月まで毎日実施できる体制を作りたいと考えている。

##### ・メンバー

平均5～6名の方が通ってきている

##### ・仕事内容・開拓について以下のことを試行した

###### ➤ 料理

・IHの料理だったので慣れなくて、オムレツの形になることが難しかった

・だんどりなどのサポートが必要。仕事としてはどうか不明

・調理を仕事として行っていたメンバーなので、調理を行う就労継続B型の体験を実施してみてもどうかと考えている。

###### ➤ ゼムクリップ内職

・ミスが多い。スタッフの慣れが必要ではないか。

- ホットナイフ
  - ・焦げが多く仕事の依頼は難しいと言われた。スタッフのサポートが不十分。
- 缶バッチづくり
  - ・依頼された柄の調整など職員が行うことが必要であったが、失敗も少なく作成できた。
- 就労継続B型ステージDアさんのお手伝い
  - ・スタッフがついてメンバー2名と参加。特段問題なく作業を行った。

## 2. アセスメント（別紙）

### （1）目的

「タック」参加者の作業や参加状況から、仕事のための能力をアセスメントできる表を作成し、企業や就労継続事業所への支援ポイントの伝えられるようするため。

### （2）現状

- ・作業療法士が「タック」の場に参加し、アセスメント表作成のためのフィールドワークを行った
  - ・障害者の就労支援に使われている評価表
  - ・精神障害者社会評価尺度
- などから必要事項を抽出し、就労に移行できるように、関わる専門職が評価するためのアセスメント

## 3. 報告会・報告書

（1）報告会 3月21日（火） 大阪市社会福祉研修情報センター

（2）報告書作成・配布先

- ・全体に事業の進捗状況
- ・簡易版 アセスメント表を利用した内容  
認知症の疾患別のサポートの重要ポイント

報告書

- ・作成部数 500部
- ・配布先 連携団体、大阪府及び大阪府内市町の若年性認知症支援を行う課、若年性認知症支援団体、医療機関、ハローワーク、厚生労働省

簡易版 アセスメント表と支援ポイントをまとめた冊子

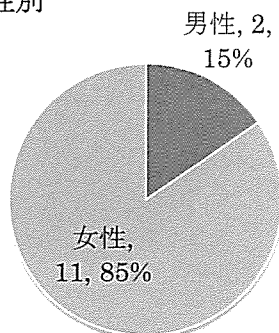
- ・作成部数 2000部
- ・配布先 連携団体、大阪府及び大阪府内市町の若年性認知症支援を行う課、若年性認知症の支援を行っている団体

## 6) タック利用者アンケート

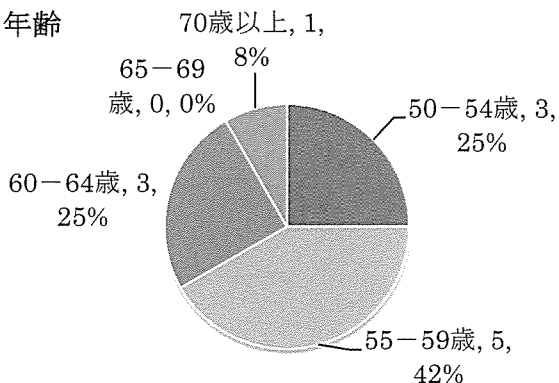
2016年12月にタック利用者に対し、今後のタックに求められることや、効果を明らかにするためにタック活動に対してのアンケートを行った。(依頼文、質問紙は資料8)

返信のあった回答者は、家族が12名であり、本人記入が1名あった。性別は男性2名、女性11名である。年齢は、50歳代9名、60歳代3名、70歳代1名である。本人との関係では、本人が1名、親が1名、残り11名は配偶者であった。

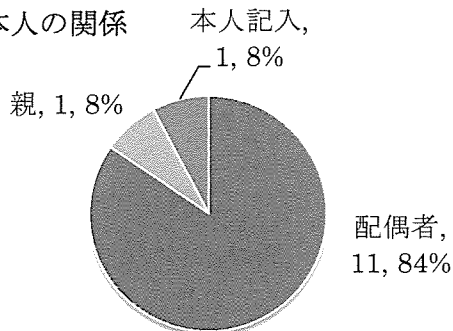
回答者の性別



回答者の年齢

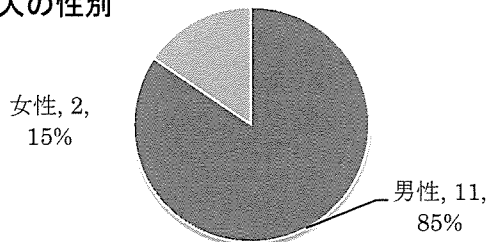


回答者と本人の関係

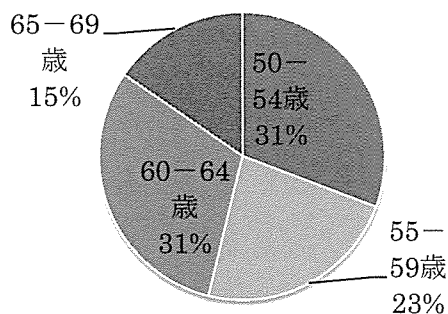


本人の性別は男性11名、女性2名であり、年齢は50歳代7名、60歳代6名である。病名はアルツハイマー型10名、前頭側頭型2名、レビー小体型1名であった。診断後の年数は1年以内2名、1年～2年が9名で初期の人が多いが、診断後3年以上も2名いた。

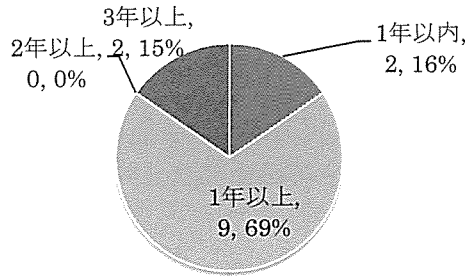
本人の性別



本人年齢

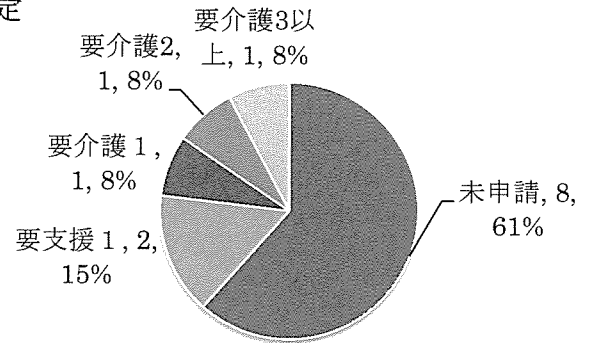


診断後年数



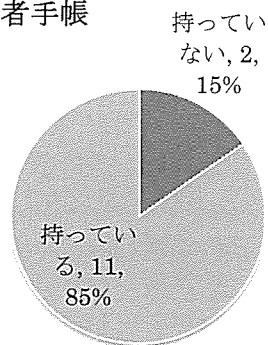
介護認定は、未申請が半数以上の8名であるが、認定を受けた人もおり、その内訳は要支援1が2名、要介護1が1名、要介護2が1名、要介護3が1名である。このことは要介護3程度の介護が必要であっても通える通所サービスがないという事でもある。

要介護認定

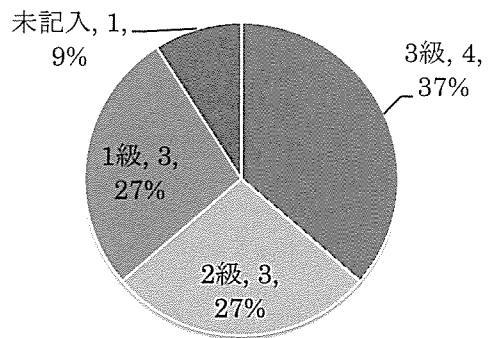


精神保健福祉手帳の取得は11名が取得済みである。内訳としては、3級4名、2級3名、1級3名である。タックを利用している家族は、当法人からの取得のアドバイスや家族同士の情報交換などで、取得率が高いことが考えられる。

精神障害者手帳

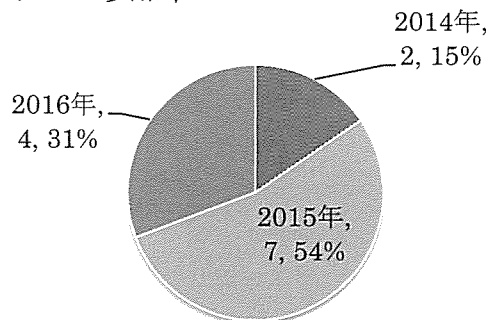


精神障害者手帳何級であるか



次にタックへの参加の内容であるが、2014年活動当初から参加している人が2名、2015年度からが7名、2016年度からが4名である。

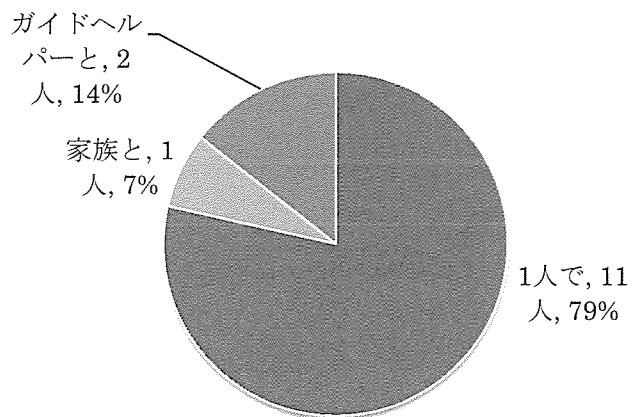
タックへの参加年



通所方法としては、一人で交通機関を利用して通っている人が11名、家族と一緒に通っている人が1名、ガイドヘルパー利用が2名である。

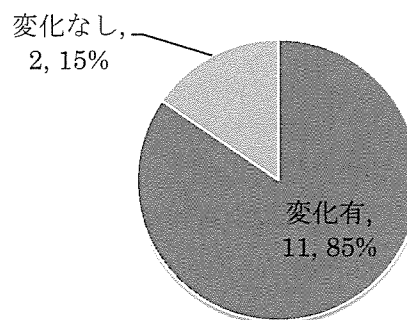
通所についての自由記述欄の回答の主なものは「(一人で) 行ける日と行けない日があるので悩む」「家族と毎日のように通所の練習をして何とか一人で行けるようになったが場所が変わると心配」「精神障害者保健福祉手帳3級では、交通費負担があり早く2級の手帳をもらいたい」などがあった。

タックへの通所方法



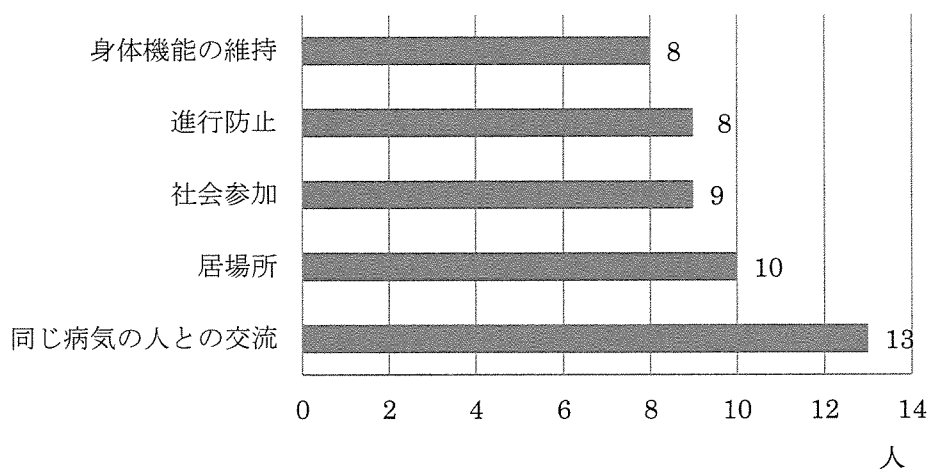
タックを利用しはじめてからの本人の変化があったと回答した人は11名であり、変化なしと回答した人は2名である。変化の内容を自由記述欄からみると「生活のめりはり」「仲間と話して楽しいと言っている」「明るくなった」「病気に対しても楽観的になった」「家族との会話が増えた」などの言葉がみられる。変化の内容はすべて肯定的な内容が記入されている。

タックを利用して変化



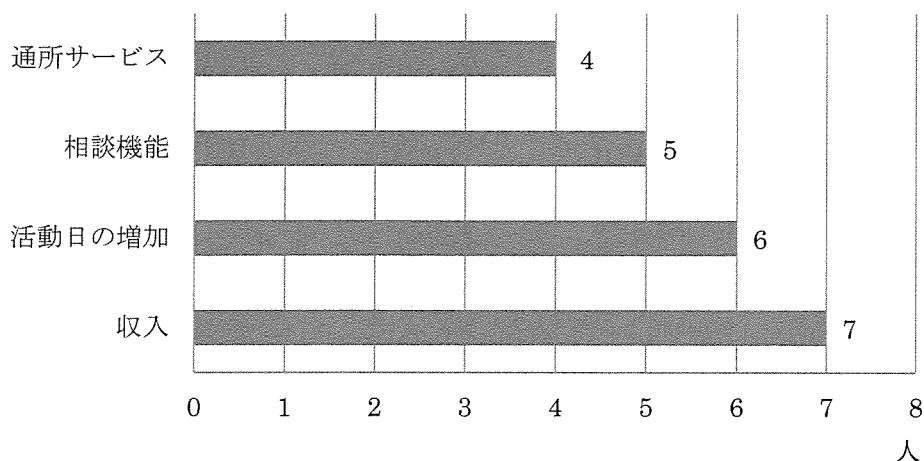
タックを利用する理由（複数回答あり）については、13名全員が「同じ病気の人との交流」と回答しており、次いで「居場所」10名、「社会参加」9名、「認知症の進行防止」9名、「身体機能の維持」8名である。

タックを利用する理由



タックについての希望（複数回答あり）については、「本人の収入につなげたい」と回答した人が最も多く7名である。次いで「活動日の増加」6名、「相談機能の充実」5名、「通所のサポート」4名となっている。自由記述欄では、「活動日を増やしてほしい」「障害支援の制度とその申請方法を具体的に教えてほしい」「(タックがある事で) 安心していただける」などの回答がある。

タックに希望すること



「認知症の本人の居場所」「社会参加」についての意見を自由記述にて求めたが、その回答には「もっと本人ができることの社会参加があれば良い」「(介護保険の) デイサービスはかなり抵抗があり参加が難しいので、若年性認知症の人でも抵抗なく社会参加できる場所が増えてほしい」「本人だけでなく家族も交流したい」「障害者の施設に通っているが家族会がないので、家族会があるタックに心惹かれる」という意見などがあつた。

#### まとめ

タックに通う事で「生活のめりはりができた」「明るくなった」「病気に対しても楽観的になった」「家族との会話が増えた」などの本人の変化がみられており、家族はタックの活動を必要だと感じており、通う日数を増やしたいと考えている人もいる。通所形態については、大半が一人でタックに通っているが、一人で毎回安定して通うことができない心配や、一人で通所できるために家族がサポートに時間をさいていることなどがあつた。また、精神障害者保健福祉手帳の場合、大阪市営交通の割引は、1級が10割引（同乗する介助者1名も含む）、2級が10割引、3級が5割引となっている。3級の方は半額を払わなければならない、本人の収入がない中での交通費支払は負担となっている。

タックを利用する理由の「同じ病気の人との交流」は他の社会資源にはないタックの大きな特徴でもある。認知症の進行防止や身体機能の維持は、他の活動でも行えることかもしれないが、「同じ病気の人」たちが集まる場というのは、社会資源としてはまだまだ少ない。「同じ病気の人との交流」が前向きな本人の変化にもつながることから、若年性認知症の人には「同じ病気の人との交流」は特に必要な活動でもある。



若年性認知症の人たちが抱える大きな問題に収入が断たれるということがあるが、家族は少しでも収入につながればと言う気持ちを抱いていた。また、本人がタックに通っていることで、日中を過ごす場所が確保されるので、通える日数を増やしたいという気持ちも持っている。

家族の立場では、本人が日中過ごすことができることの安心さが確保されているだけでなく、相談機能が併設されていることや家族同士の交流を望んでいることなどが明らかになった。

以上のことから、本人の居場所づくりについては、「通所のサポート」が必要であり、「同じ病気の人同士の交流」を大切にし、本人だけでなく家族に対しての「相談機能の充実」や、「家族会など家族も交流できる場」が重要である。

